

# 黒塚

一名 安達原

禪竹作

前

ワキ 東光坊祐慶

ワキヅレ 随行山伏

シテ 賤の女

後

ワキ 前に同じ。

ワキヅレ 前に同じ。

シテ 鬼女

地は 陸奥（今は岩代）

季は 秋

ワキ次第 「旅の衣は篠懸の。く。露けき袖やしをるらん。

サシ 「是は那智の東光坊の阿闍梨。祐慶とは我事なり。

ツレワキ 「それ捨身抖擻の行体は。山伏修行の便りなり。

ワキ 「熊野の順礼廻国は。皆釈門の習なり。

二人 「然るに祐慶此間。心に立つる願あつて。廻国行脚に趣かんと。

歌 「我本山を立ち出で。く。分け行く末は紀の路がた。塩崎の浦をさし過ぎて。錦の浜のをりく

は。なほしをりゆく旅衣。日も重なれば程もなく。名にのみ聞きし陸奥の。安達が原に着きにけり。く。

ワキ詞 「急ぎ候ふ程に。是は、や陸奥の安達が原に着きて候。あら笑止や日の暮れて候。此あたりには人里もなく候。あれに火の光の見え候ふ程に。立ちより宿を借らばやと存じ候。

シテサシ 「実にわび人のならひ程。悲しきものはよもあらじ。

かかる浮世に秋の来て。朝けの風は身にしめども。  
胸を休むる事もなく。昨日も空しく暮れぬれば。  
まどろむ夜半ぞ命なる。あら定めなの生涯やな。

ワキ詞

「如何に此屋の内へ案内申し候。

シテ詞

「そも如何なる人ぞ。

ワキ、ツレ

「如何にや主聞き給へ。我等始めて陸奥の。安達が  
原に行き暮れて。宿を借るべき便もなし。願はく  
は我等を憐みて。一夜の宿をかし給へ。

シテ

「人里遠き此野辺の。松風はげしく吹きあれて。月  
影たまらぬ閨の内には。いかでか留め申すべき。

ワキ

「よしや旅寐の草枕。今宵ばかりの仮寐せん。たゞ  
くゝ宿をかし給へ。

シテ

「我だにも憂き此庵に。

ワキ

「たゞ泊らんと柴の戸を。

シテ

「さすが思へば痛はしさに。

地

「さらばとゞまり給へとて。扃を開き立ち出づる。

異草も交じる茅苳。うたてや今宵敷きなまし。強  
ひても宿を狩衣。かたしく袖の露ふかき。草の庵  
のせはしなき。旅寐の床ぞ物うき。く。

ワキ詞

「今宵の御宿かへすぐも有難うこそ候へ。又あれ  
なる物は見馴れ申さぬ物にて候。是は何と申した  
る物にて候ふぞ。

シテ詞

「さん候。是はわくかせわとて。いやしき賤の女の  
いとなむ業にて候。

ワキ

「あらおもしろや。さらば夜もすがら営うで御見せ  
候へ。

シテ

「実に恥かしや旅人の。見る目も恥ぢずいつとなき。  
賤が業こそ物うけれ。

ワキ

「今宵とゞまる此宿の。主の情深き夜の。

シテ

「月もさし入る。

ワキ

「閨の内に。

地次第

「真麻苧の糸を繰り返し。く。昔を今になさばや。

シテ「賤が續芋の夜までも。

地「世わたる業こそ物うけれ。

シテ「あさましや人界に生を受けながら。かゝる浮世に  
明け暮らし。身を苦しむる悲しさよ。

ワキサシ「はかなの人の言の葉や。まづ生身を助けてこそ。  
仏身を願ふ便もあれ。

地「かゝる浮世にながらへて。明暮ひまなき身なりと  
も。心だに誠の道にかなひなば。祈らずとても終

クセ「唯是れ地水火風の。仮にしばらくも纏はりて。生  
になど。仏果の縁とならざらん。

クセ「唯是れ地水火風の。仮にしばらくも纏はりて。生  
死に輪回し。五道六道にめぐる事。唯一心の迷ひ  
なり。凡そ人間の。あだなる事を案ずるに。人  
更に若き事なし。終には老となる物を。かほどは  
かなき夢の世を。などや厭はざる我ながら。あだ  
なる心こそ。恨みてもかひなかりけれ。

ロンギ地「さてそも五条あたりにて。夕顔の宿を尋ねしは。

シテ「日蔭の糸の冠着し。それは名高き人やらん。

地「加茂のみあれにかざりしは。

シテ「糸毛の車とこそ聞け。

地「糸桜。色もさかりに咲く頃は。

シテ「来る人多き春の暮。

地「穂に出づる秋の糸薄。

シテ「月に夜をや待ちぬらん。

地「今はた賤が繰る糸の。

シテ「長き命のつれなさを。

地「長き命のつれなさを。思ひ明石の浦千鳥。音をの

みひとり泣き明かす。く。

シテ詞「如何に客僧達に申し候。

ワキ詞「承り候。

シテ「あまりに夜寒に候ふ程に。上の山に上り木を取り  
て。焚火をしてあて申さうずるにて候。暫く御待

ち候へ。

ワキ「御志ありがたうこそ候へ。さらば待ち申さうずるにて候。やがて御帰り候へ。」

シテ「さらばやがて帰り候ふべし。や。如何に申し候。わらはが帰らんまで此閨の内ばし御覧じ候ふな。」

ワキ「心得申し候。見申す事は有るまじく候。御心安く思し召され候へ。」

シテ「あらうれしや候。かまへて御覧じ候ふな。此方の客僧も御覧じ候ふな。」

ツレ「心得申し候。(中入)」

ワキ「ふしぎや主の閨の内を。物の隙よりよく見れば。

膿血忽ち融滌し。臭穢は満ちてほうちやくし。膚膩尽く爛壊せり。人の死骸は数しらず。軒とひとしく積み置きたり。如何さま是は音に聞く。安達が原の黒塚に。籠れる鬼の住家なり。

ツレ「恐ろしやかゝる憂き目を陸奥の。安達が原の黒塚に。鬼籠れりと詠じけん。歌の心もかくやらんと。」

二人歌 「心も迷ひ肝を消し。く。行くべき方は知らねど

も。足に任せて逃げて行く。く。

後ジテ 「如何にあれなる客僧とまれとこそ。さしも隠し、

閨の内を。あさまになされ参らせし。恨み申しに

来りたり。胸を焦がす焰。感陽宮の煙紛々たり。

地 「野風山風吹き落ちて。

シテ 「鳴神稻妻天地に満ちて。

地 「空かき曇る雨の夜の。

シテ 「鬼一口に食はんとて。

地 「歩みよる足音。

シテ 「振りあぐる鉄杖のいきほひ。

地 「あたりを払つて恐ろしや。

ワキ 「東方に降三世明王。

ツレ 「南方に軍荼利夜叉明王。

ワキ 「西方に大威徳明王。

ツレ 「北方に金剛夜叉明王。

ワキ「中央に大日大聖不動明王。

二人「唵呼嚕々々旋荼利摩登枳。唵阿毘羅吽欠娑婆呵。  
吽多羅吒干輪。

地「見我身者發菩提心。く。聞我名者斷惡修善。  
聽我說者得大智惠。知我身者即身成仏。即身成  
仏と。明王の繫縛にかけて。責めかけく祈り伏  
せにけり。さて懲りよ。

シテ「今まではさしも実に。

地「今まではさしも実に。怒りをなしつる鬼女なるが。  
忽ちによわりはてゝ。天地に身をつゑめ。眼くら  
みて足もとは。よろくとたゞよひめぐる。安達  
が原の黒塚に。隠れ住みしもあさまになりぬ。あ  
さましや恥かしの我姿やと。言ふ声はなほ物冷ま  
しく。言ふ声はなほ冷ましき。夜嵐の音に。立ち  
まぎれ失せにけり。夜嵐の音に失せにけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション  
『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹 著